

[資料] 秋田から見た 1923 年関東大震災

— 地元紙秋田魁新報の内容紹介 —

秋田大学地域防災減災総合研究センター* 水田 敏彦

鏡味 洋史†

1923 Great Kanto Earthquake seen from Akita

— A study based on local newspaper, Akita Sakigake Shinpo —

Toshihiko MIZUTA

Research Center for Regional Disaster Prevention and Mitigation, Akita University,
Tegata Gakuen-machi 1-1, Akita, 010-8502 Japan

Hiroshi KAGAMI

Ishikari, 061-3214 Japan

The 1923 Kanto Earthquake reaches its 100th anniversary in 2023. At this juncture, we clarify how Akita was affected by this earthquake and what kind of response it took. We have collected and analyzed local newspapers and administrative materials from the time regarding damaging earthquakes since the Meiji era, and have clarified the damage situation and Akita Prefecture's response to earthquakes. In this paper, we focus on local newspapers and organize information gathering, rescue, relief activities, etc. after the earthquake.

At the time of the earthquake in 1923, the population of Akita Prefecture was over 970,000, and the main products were rice, timber, mining, and oil. Direct trains operated between Tokyo and Akita. We referred the newspaper "Akita Sakigake Shinpo", representative one in Akita Prefecture, disaster articles related to Akita were selected and listed up to time series table with categories of information transmission, traffic conditions, and movements of evacuees. From this table the responses of Akita Prefecture, Akita City, the Red Cross, and various other organizations are disclosed. Finally, the impact of rising prices on the lives of prefectural residents was also clarified.

Keywords: 1923 Great Kanto Earthquake, Akita prefecture, Newspaper articles.

§ 1. はじめに

1923 年(大正 12 年)関東地震は 2023 年に発生から 100 年目を迎える。この節目にこの地震による災害が秋田県内ではどのような影響を受け、どのような対応を行ったのか明らかにする。例えば『秋田市史』[秋田市(2004)]によると、秋田駅に市の救護班を設け震災避難者の救護に当たったほか、救護通信部を東京に派遣し在京秋田市民の安否調査を行ったこと、こ

の他、日本赤十字社秋田支部なども救護活動を行っていることなどが記述されている。筆者らは明治以降の被害地震について、当時の地方新聞、行政資料などを収集・整理し、被害状況や秋田県の震災対応などを明らかにしてきた[例えば、水田・鏡味(2010, 2012)]。本論では、1923 年関東地震当時の秋田県の状況について地方新聞の記事に着目し、地震発生後の情報収集、救援、救済活動などを整理する。

* 〒010-8502 秋田市手形学園町 1-1

電子メール: tmizu@gipc.akita-u.ac.jp

† 〒061-3214 北海道石狩市在住

電子メール: ve3iv6@bma.biglobe.ne.jp

§ 2. 秋田県の 1923 年関東大震災当時の時代背景

2.1 震災当時の秋田の概要

地震が発生した 1923 年当時の秋田県の時代背景について、1889 年(明治 22 年)の市制施行により秋田市が県内唯一の市となり、1905 年(明治 38 年)には奥羽本線が全線開通していた。また、1910 年(明治 43 年)には日本で唯一の官立鉱山専門学校であった秋田鉱山専門学校が設立されている。地震発生当時 1923 年の県人口(現住人口)は 97.1 万人、秋田市の人口(現住人口)は 4 万 2 千人と 4 万人を越え[秋田県(1925)]、米、木材、鉱山業、石油が主要産業であった。この間、秋田県では 1896 年(明治 29 年)に横手盆地の直下で陸羽地震が発生し、そして、この地震の 18 年後にあたる 1914 年(大正 3 年)に秋田仙北地震が発生しており被害地震が続いていた[水田(2014)]。水害・冷害など他の災害も多く、東京始め域外から救済を多く受けていた。例えば、東北九州災害救済会は 1914 年に東北の凶作、桜島の噴火災害を対象に設けられ秋田仙北地震にも適用されている[水田・鏡味(2012)]。このような時代背景から、大正関東地震についても官民挙げての相互扶助の意識が高かったと思われる。

2.2 震災地への交通事情

当時の交通状況を概観して[鉄道 100 年略史(1972)]、図 1 に関東地方と秋田県をつなぐ当時の鉄道網を示す。東北本線が上野駅から青森駅まで 1891 年(明治 24 年)には全線開通していた。上野から秋田方面へは奥羽本線が福島駅から山形県と秋田県を經由して青森駅まで 1905 年(明治 38 年)に開通していた。地震発生当時は上野―秋田間を奥羽本線経由で直通急行(夜行)列車が運行されており、上野から秋田まで約 15 時間程度で到着できた。なお、羽越線の全線開通は 1924 年(大正 13 年)7 月であり、秋田への上越・羽越線回りのルートはなかった。

§ 3. 地元紙が伝えた震災地の状況

秋田県の代表的な新聞に『秋田魁新報』があり、秋田県立図書館で閲覧複写し資料とした。『秋田魁新報』は全県紙として大正期には国内における有力な地方代表紙に数えられ[鎌田(1956)]、記事も多いので参照した。1923 年 9 月 2 日付号外から 9 月 10 日までの紙面を調べた。関東地震の秋田に関連する新聞記事のみ選び、一覧を本文末尾の付録に示す。な



図 1 関東地方と秋田県をつなぐ当時の鉄道網
Fig.1 Railway network at the time connecting the Kanto region and Akita prefecture.

お、義援金関係の記事は多いが省略し、後述する新聞記者の現地踏査報告については 9 月 16 日から 9 月 26 日までの記事を読みとり利用した。また、新聞記事の内容については本章と次章で述べる。

3.1 被害情報の収集と新聞の発刊

『秋田魁新報』は発災翌日(9 月 2 日)に「近年稀なる大地震東京を中心に大崩壊死傷者倒潰家屋無数東京全市至る所大火」の記事から始まる号外を発刊している。被害情報の収集と伝達については、「地震の分つたのは 1 日の午後 5 時、電信電話が止まり被害程度想像だにつかない、比較的便宜の情報をうるは鉄道方面であるからまづ記者を秋運(※秋田運輸事務所)に派遣第 1 号外発刊の準備に着手、その間に福島、仙台、青森へ電話し―は大阪を経て新潟、福島、青森から―は船橋、原町無線電信所を經由し

福島へくる通信を電話，2日の朝6時頃にいたるや絶え間なく青森及び仙台から頻々報道してくる，これを速記し翻訳し工場へ回送，(※9月2日)午後3時まで第4号外を発刊し市内および郡部の主なる各所に配付」したことが報じられている。また，3日後(9月3日)には「1日午後5時第1報を出し以後数回に亘り号外を発行，第3報より配達の疲労甚だしく到底戸毎に配達すること不可能，自動車数台を以て各町毎に配付」したことが報じられている。図2に紙面から見た被害情報の収集ルートを示す。なお，ラジオ放送の開始は震災から2年後の1925年(大正14年)からであり，地震当時の迅速な情報収集・伝達手段は無線や電報・電話であった。

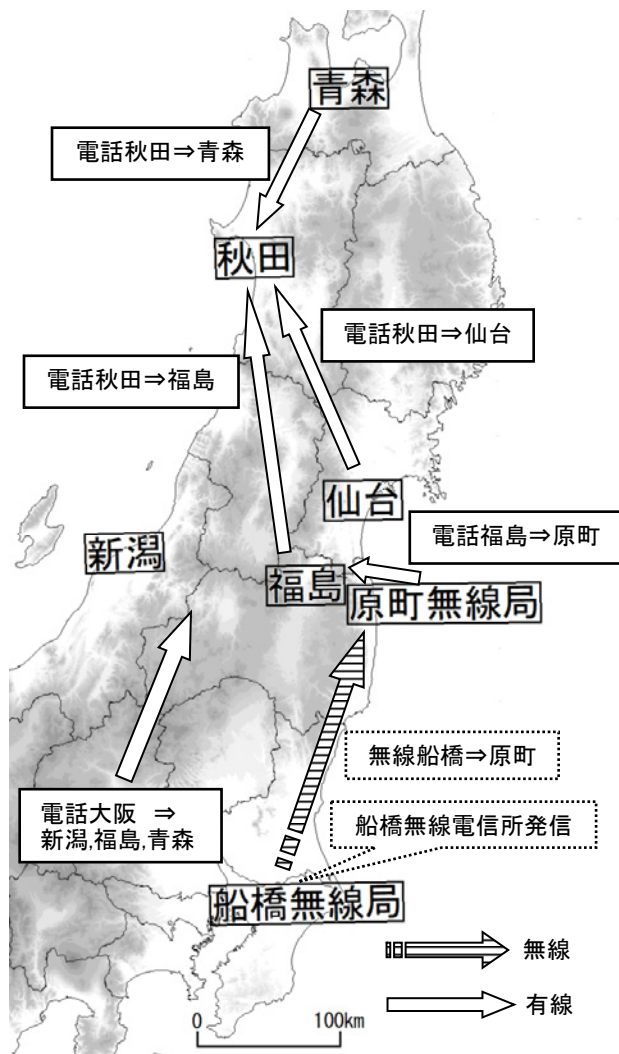


図2 紙面から見る震災直後の被害情報収集ルート

Fig.2 Collection route of Damage information immediately after the disaster seen from newspapers.

3.2 在京罹災者の帰郷と新聞記者の派遣による記事

震災地の状況は，仕事で上京していた在京秋田県人の体験談，秋田魁新報派遣記者により被害が報告されている。発災4日後(9月4日)の紙面には「上野に一夜を明かし震災の巷を逃れ昨日帰郷せる N氏凄惨たる帝都の惨状を語る」とし，3日午前11時下り急行で秋田駅に到着した海運業 N氏が体験した東京市と帰郷までの状況が，5日後(9月5日)の紙面には「生き地獄の如き帝都の震災最中の3日間を駆けつり廻り昨日帰郷せる N氏語る」とし，3日午前11時川口発の汽車で帰郷した呉服店 N氏が体験した東京市の惨状が報じられている。また，帰郷した製材会社社長に取材を行い，7日後(9月7日)の紙面で「筏にすがり一夜を明し九死に一生をえて帰郷した M氏は語る」とし，東京市の状況が伝えられている。

『秋田魁新報』では東京市に記者を派遣しており，派遣記者の現地踏査報告が「灰の東京本社記者現地踏査」として発災16日後(9月16日)から26日後(9月26日)の紙面まで報じられている。「(一)皮肉に大建築のみ倒れている，(二)聞くもの見るもの涙のたねばかり，(三)玄米配給所に群れなす罹災者，(四)飢餓と疲労と恐怖におののく全市民，(五)戦場の様な各新聞社通信社の避難所，新聞雑誌印刷活版所等の被害，(七)昨日の大商店主も今日は露天商人，(八)通信連絡は軍隊の手に依りて出来る，(九 ※9/24と9/26の2回)一般に金に窮して居る」と10回にわたり東京市の状況が伝えられている。

§ 4. 新聞記事の時系列での整理

新聞については震災対応の様子が詳しく記載されており，新聞記事に表れた震災対応の状況を時系列で整理し表1に示す。新聞記事の内容から対応の実施日を特定して時間順に列べ，[]内に新聞の掲載日を示した。震災対応のまとめを以下に示す。

4.1 交通通信の状況

交通の状況について，地震直後東北本線の被害と復旧状況が多く報じられている。東北本線は被害が少なく復旧も早く，発災4日後(9月4日)には復旧したことが報じられ震災地と東北地方との人・物資の移動や震災情報の伝達に大きな役割を果たしている。一方，同じ日に秋田駅発上り急行列車は青森で満員となり秋田駅では切符発売を停止したことが報じられている。通信の状況は，発災直後は全く杜絶状態であったことが報じられている。郵便は3日後(9月3

日)「東京横浜神奈川千葉静岡各県に差出す郵便は発送の途なく引受けを停止」することが報じられ、その後7日後(9月7日)に「はじめて郵便の到着を見災害地方に父兄、親戚、知人を有する郷国の人々は漸くこれ等の安否を知る」と報じられている。一般電信は「災害地より発着する電報は7日から取扱い開始される旨秋田局から通牒」されたことが報じられている。

4.2 各機関の震災対応

秋田県の対応:関東地方での大震災発生の情報を受け県警察部が発災3日後(9月3日)の午後5時に1週間の予定で震災地の情報収集のために上京し、また、東京に向け食料品を鉄道で発送したことが報じられている。4日後(9月4日)より罹災者救済のための米の買入に尽力し、5日後(9月5日)には在京県人を救護するための救護班を組織し東京市へ向け出発、6日後(9月6日)には県衛生会が医師看護婦かならなる救護班を組織し上京したことが報じられている。さらに7日後(9月7日)には震災地小屋がけ材料として木材、筵、縄の発送を開始し、8日後(9月8日)には震災救護事務所を川口町、田端、隅田川に開設したことが報じられている。

秋田市の対応:秋田市役所は発災6日後(9月6日)より避難民救済のため所員並びに看護婦を引率し、下車及び通過下り各列車の罹災避難民のため秋田駅プラットホームに救済所を設け、負傷者等にも応急救置を行ったことが報じられている。

各種団体の対応:赤十字秋田支部と秋田運輸事務所の震災対応が多く報じられ、多くの機関が震災地や秋田県内で救援、救済活動を行っている。発災3日後(9月3日)より赤十字秋田支部は救護班を派遣し、また、秋田運輸事務所では復旧工事のため通信工事などが上京している。その他、5日後(9月5日)には仏教青年団が罹災児童救済のため上京し、土崎の日本石油ではガソリンを東京に発送、6日後(9月6日)には青年団や在郷軍人による秋田県内各駅での罹災避難民に対する救済活動のほか秋田教会の救護活動が報じられている。

その他:国が罹災者支援のために実施した震災対応が多く報じられている。発災3日後(9月3日)には、罹災者が東京より国元へ避難する場合には電車賃が無料になったことが報じられている。一方、震災地へ向かう県民に対しては4日後(9月4日)「秋田駅午後5時38分発上り急行列車青森にて既に満員秋田駅では切符発売停止」「震災地に向ふ旅客混雑甚だしく救済を目的とする団体以外入京を許さず救済を目的とする30名以上の団体以外乗車券を発売せ

ず」と報じられ、さらに「震災地に入る者戒厳令により東京横浜は勿論其他一帯に亘り入京を禁止」されたことが伝えられている。

4.3 秋田県内への避難民

秋田駅に下車する罹災避難民が多数おり、発災5日後(9月5日)の紙面には「東京市の大震災に遭ひ避難して帰つたもので秋田駅に下車したのは3日に10名、4日急行列車で13名、同日午後の下り直行で9名」7日後(9月7日)の紙面には「東京から避難して秋田駅に下車する者日々多数あり3日の数は明らかならぬも十数名で4日は25名5日は62名、昨6日は午前11時55分着列車で56名であるがこれは全部無賃乗車の数」であることが報じられている。その他、避難者と称し浮浪者が入市し無銭飲食などを行っていることが報じられている。

4.4 県民生活への影響

秋田県民における生活への影響について、物価が高騰したことが多く報じられている。発災4日後(9月4日)の紙面で「昨日県では早速東京地方震災罹災移民救助の挙を企てて取あえず食料品買出しを開始したが直接衝に当たった県吏員の談によれば日常品は2日より頃に価格高騰し殊に食料品の如きは仲々手放すことをとせず」と物価の高騰が伝えられ、7日後(9月7日)の紙面では「目下著しく高騰したものは亜鉛板で同品は市場品切れ」と報じられている。その後9日後(9月9日)になって売り惜しみ買い占めをなすものには県警察が徹底して取締を行うことが報じられている。また、祭典など行事の中止・自粛が行われ、7日後(9月7日)の紙面では「14,15両日の市内外町鎮守日吉神社例祭大災害のため一昨夜協議の結果余興は全部廃止してその費用の一部を罹災救に寄付」翌8日の紙面では「26日開催の筈なりし県酒造組合連合会主催全県清酒醤油品評会は京地震災救済に忙殺されていると亦遠慮すべきが当然だといふ見解とて無期延期」したことが報じられている。

表1 新聞記事より作成した震災対応の時系列
Table 1. Chronological order of the response to the earthquake based on newspaper articles

	月日 新聞記事[掲載日]
秋田県の	9/3 村地警察部長保安課警部、高課刑事、農務課属を随へ昨日午後5時上京に途に就いた滞在1週間の予定[9/4] 県救護の迅速徹底のため米の買入及食料品の買

対応 秋田 県の 対応	入、義援金の寄付事業、日用品の寄付募集、輸送、会計に関する事務を分担[9/4] (9/3)岸本知事各郡市長に電報を以て京地震災救済に努力されたき旨激励[9/4] 東京に向け食料品東京に3日夜発送秋田市3車横手約28車[9/4] 9/4 県米穀2万俵を社会局宛に輸送する計画を立て浅舞より3車、横手より2車、後三年より2車、大曲より1車勸業課長巡回し米の買上に尽力[9/5] 警察署員を派して市内物価暴騰警戒と調査暴利商人に対しては厳重な取締を励行[9/5] 9/5 在京県人を救護し並びに安否を尋ね故郷との連絡を計る目的を以て救護班を組織、巡查部長1名巡查2名を1隊とする3隊を組織し午前4時出発、他に高野属を隊長医師1名人夫5名の1隊を組織し、天幕、寝具、衛生材料自転車等を携帯し午後5時急行を以て出発[9/6] 救援費65万円県参事会決議買入費と運搬費[9/6] 米商地主に買上交渉2万俵は輸送準備できた6日午前8時貨車で送る手筈[9/6] 東京市近県罹災者救済のため9月2日公布した非常徴発令5日本県に達し小屋かけ材料3万石の徴発を命じられた、貨車400車を要する配給に困難故に青森港まで陸路輸送同港より船舶にて海路輸送すべきや調査[9/6] 県救護団白米午後7時の列車に積み送付[9/7] 9/6 県衛生会医師事務長外2名および看護婦長外9名の救護班を組織午前11時の直行にて上京、救済事務局の指示せる場所において救護に従事、第2班8日、第3班10日出発各班とも300人を手当し得るだけの準備を為し出発[9/7] 小屋掛材木材仮小屋3万戸分全部貨車輸送にて6日より15日に毎日58車465輛おくる計画[9/7] 震災地救急のため県は木炭3千余俵(10車)を横掘並に二ツ井より田端に輸送[9/8] 村地部長の視察報告、惨状甚だし[9/7] 9/7 村地警察部長と共に上京した保安課警部午前11時の急行で帰庁[9/8] 震災地小屋がけ材料として木材、筵、縄発送開始したが12日を以て終る筈[9/8] 9/8 震災救護事務所第1班川口町に第2班田端においた隅田川駅まで列車開通と共に第3班を隅田川においた[9/9] 罹民救済のため食料品合計2車輸送[9/9]
秋 田 市 の 対 応	9/6 避難民救済のため所員並びに看護婦を引率し秋田駅プラットホームに救済所を設け下車及び通過の下り各列車の罹災避難民のため供与し負傷者等にも応急処置[9/7]
各 種 団 体 の 対 応	9/2 秋田運輸事務所:戒厳令公布の電報秋運に達するや直ちに配手車くばりを始め米輸出の盛んな十文字、横手、大曲、秋田等の各駅に5,6車の貨車を配給し発送の準備を了した[9/3] 9/3 秋田運輸事務所:通信工手16名電話機14ヶ其他付属品を携帯午後5時38分上り急行にて上京[9/5] 9/4 赤十字秋田支部:救護班を組織することに決定し午後5時上京外に救護班2組組織して向ふべく準備中[9/4]第1班救護班を派遣[9/9] 秋田運輸事務所:機関手3名火夫3名3日分の食料を携帯応援のため午前11時37分上り直行
各 種 団 体 の 対 応	列車で上[9/5] 9/5 仏教青年団:救護班午前11時の上り急行列車にて上京東京罹災児童500乃至300名を引きとり市内各寺院に収容救護[9/7] 日本石油:土崎日石から東京へ送ったガソリン数量5日までに2597箱に達し尚続々発送[9/7] 9/6 青年団・在郷軍人:飯詰、横手、湯沢等の各駅青年団並びに在郷軍人出張し帰来の避難民に対し救済[9/7]相染青年団京地避難者帰省せるもの土崎駅通過者果物提供[9/8]仙北郡荒川村青年団員100名食料医薬品を携へ6日往復1週間の予定にて出発[9/7] 秋田教会:餅、梨、手拭、草履、半紙、仁丹等を準備して救護に努力[9/7] 9/7 赤十字秋田支部:第2班救護班を派遣[9/9] 歩兵第一七連隊:400名午後7時秋田駅発の列車4輪客車10輛、貨車2輛を連結分乗出発[9/8] 9/8 赤十字秋田支部:救護班を上京せしめ多額の費用を要する秋田支部長から各軍の委員長宛に年釀金取纏め送金方依頼[9/9] 秋田大林区署:製炭現物40万貫輸送開始[9/9] 青年団:雄勝郡横掘町青年団横掘停車場に団員総出となり食料等を給し休養宿所等の世話[9/9]
そ の 他	9/3 罹災者東京より国元へ避難する者無賃乗車[9/5] 9/4 震災地に入る者戒厳令により東京横浜は勿論其他一帯に亘り入京を禁止されたが県係官吏出張し震災地に入るものを審査[9/5] 上京者市町村長の身元証明書必携又滞在日数中の食料品を携帯せねばならぬ東京に入るには信越線ただ一線[9/5] 秋田駅午後5時38分発上り急行列車青森にて既に満員秋田駅では切符発売停止[9/5] 震災地に向ふ旅客混雑甚だしく、救護を目的とする団体以外入京を許さず、救済を目的とする30名以上の団体以外乗車券を発売せず[9/5] 9/7 秋運管内の公認運送店組合震災地行の救恤金救護品県託送若くは市町村の証明あるもの一切無手数料にて取扱[9/8] 午後7時記念館で罹災者救助に関する講演会を開催[9/9] 9/8 臨時救護事務局情報部4日来震災彙報として1日1回の公報今後県に到達せる公報県議事堂の堀に貼りつけて一般に見せる[9/9] 9/9 当分奥羽線上り急行列車は郵便物小荷物の外一般乗客の取扱ひをなさぬ[9/10]

§ 5. おわりに

1923 年関東大震災について地方新聞である『秋田魁新報』の記事を参照し、秋田県における震災の影響や対応を時系列に整理した。明らかにされた主な項目は以下の通りである。

- 1) 発災翌日より被害が大きく報じられている。震災情報の収集について、地震直後船橋、原町無線電信所を経由し福島に来る情報、また、大阪を経由して東北地方に来る情報を秋田から電話することにより災害情報を収集し、紙面を発刊している。
- 2) 震災地の状況について、在京者の体験談、秋田県の警察部長などの東京視察、『秋田魁新報』の派

遣記者により被害が報告されている。また、秋田県人の動向について、県の救護班が罹災県人を取り調べて報告している。

- 3) 東京とのアクセスについて、東北線の被害は少なく復旧も早く、東北地方との人・物資の移動や震災情報の伝達に大きな役割を果たしている。震災地東京への移動は、戒厳令下で個人での入京が制限され、発災の4日後には上り急行列車が青森で満員となり秋田駅では切符発売が停止となっている。一般の郵便や電信は発災7日後から再開したことが報じられている。
 - 4) 救援、救済活動について、秋田県は復旧資材・食料の供給源の一つとなっている。救恤品は米、木材、木炭が多い。発災3日後より赤十字秋田支部など多くの機関が救護班を派遣し、秋田運輸事務所では通信工事などが上京して復旧活動を行ったことが報じられている。また、県内各駅に下車した罹災避難民への支援のため秋田市役所、青年団、在郷軍人などが発災6日後より救済活動を行ったことが報じられている。
 - 5) 震災の秋田県への影響について、発災3日後より物価が高騰し問題となったことが報じられ、その後取締を励行している。また、祭典など行事の中止・自粛が行われたことが報じられている。
- 秋田県公文書館には、県が作成・取得した1923年関東地震の震災対応に関する史料が残されている。今後の課題として、新聞報道されているこれらの対応を秋田県に残されている公文書側からの裏付けを含めて検討を行っていきたい。

謝辞

本稿の作成にあたって、匿名の査読者から有益なご意見を多数頂き、本稿の内容を大幅に改善することができました。ここに記して謝意を表します。

対象地震: 1923 年関東地震

文 献

- 秋田県, 1925, 秋田県第41回統計書内務, 157 pp.
- 秋田市, 2004, 災害, 秋田市史第四巻近現代 I 通史編, 681-682.
- 鎌田喜市郎, 1956, 秋田県新聞史, 地方別日本新聞史, 41-50.
- 水田敏彦, 2014, 秋田県で発生した明治以降の歴史地震とその教訓, 歴史地震, 29, 243-244.
- 水田敏彦・鏡味洋史, 2010, 1896.8.31 陸羽地震の秋田県における震災対応に関する文献調査, 日本建築学会技術報告集, 16-34, 1207-1210.
- 水田敏彦・鏡味洋史, 2012, 1914.3.15 秋田仙北(強首)地震の秋田県による震災対応に関する文献調査, 日本建築学会技術報告集, 18-39, 785-788.
- 鉄道百年史編さん委員会, 1972, 鉄道百年略史, 鉄道図書刊行会, 463pp.

付録 新聞記事一覧

◎印は 2,3 段の大見出し, ○は 1 段の小見出し

月/日	面	見出	要約・説明
9 月 1 日 11 時 58 分地震発生			
9/2	5	○利根川の鉄橋橋柱傾斜上下列車不通	仙台電話 1 日午前零時 10 分の強震と強雨のため一般電信、電話不通、午後 1 時東北本線久喜栗橋間の利根川鉄橋橋柱傾倒し上下各列車とも全部不通、常磐線土浦、神立両駅間において同時刻頃久ノ浜駅発上り上野行き旅客列車脱線転覆との情報仙台鉄道局に到達目下通信機器不通のため詳細は一切不明
		○東北本線	栗橋鉄橋の橋台破損して小山大宮間の列車全部運転休止開通の見込みなし
9/3	号外	○東北線は 3 日開通せん	東北本線は目下不通工夫多数督促して工事を急ぎつつあれば明日正午までには開通する見込
9/3	2	○我が社の号外は今後自動車で	関東地方大地震に際し我社は 1 日午後 5 時第 1 報を出し以後数回に亘り号外を発行して詳報につとえたも配達の疲労甚だしく到底戸毎に配達すること不可能の状となり己むをえず自動車数台を以て各町毎に撒布
		○大地震と本紙	臚(おぼろ)けながら地震の分つたのは 1 日の午後 5 時である電信も電話もとまってしまうので強弱、被害程度のごとき無論想像だにかたじけなく、かかる場合において比較的便宜の情報をうるは鉄道方面であるからまづ編集員および工場員に総動員を行ひ記者を秋運に派した所惨事であるから第 1 号外発刊の準備に着手し、その間に福島、仙台、青森へ電話し一は大阪を経て新潟、福島、青森から、一は船橋、原の町無線電信所を経由し福島へくる通信を電話せしむる事にした、2 日の朝 6 時頃いたるや絶え間なく青森及び仙台から瀬々報道してくる、これを速記し翻訳し工場へ回送する目のまわるやうの多忙裡に、午後 3 時まで第 4 号外を発刊し市内および郡部の主なる各所に配付した、しかし市中配達は直属配達人の疲労により是非なく自動車で撒布せしめたのもあり自然配達漏れを免れぬまいからこの旨を諒とおかされたい

付録(続き)

月/日	面	見出	要約・説明
9/3	3	◎米の輸送に秋運は全力をそそぐ	戒厳令公布の電報秋運に達するや配車掛りにては直ちに配車手くばりを始めた、米の輸出の盛んな十文字、横手、大曲、秋田等の各駅に 5, 6 車の貨車を配給し命令の着き次第優先発送なすや一切の準備を了した
9/4	2	○鉄道回復割合に早からむ東北本線	東北本線鉄橋を破損され其他各所に陥没を見たので復旧も容易ならぬ状態であるが之が復旧工事は東京市を救助する第一歩として努力し早く回復する予定
9/4	3	○東京へ入るは信越線のみ入市は身元証明書必要	東京に入るには信越線ただ一線あるのみであるが川口、赤羽間は徒歩連絡であるので東京に入らんと欲する者は大宮に下車して自動車で行く外策はない、大宮から直行すれば 3 時間で到着することが出来るが戒厳令が敷かれてあるから東京に入るには飲食物と身元証明書の携帯を要する
		○東京横浜への郵便は中止発送の途なく引き受けず	秋田郵便局長談東京横浜神奈川千葉静岡各県に差出す郵便は発送の途なく引受けを停止
9/4	5	◎上野に一夜を明かし震災の甚を逃れ昨日帰秋せる N 氏凄惨たる帝都の惨状を語る	(現男鹿市) 船川の N 氏は 31 日海運業の打合せとし神戸行きをなすべく上り急行列車に乗り東京へ向つた駿河台下の常宿龍名館分店に行李を託し午後神戸に向ふべく万世橋駅から電車に乗り東京駅へ駆付くる途中突然起つた地震！凄惨たる一夜を上野公園に明し 2 日朝徒歩して川口駅へ来り昨前 11 時下り急行にて秋田に着した、東京における地震の情報を齎(もたら)せる人とし最先であるから記者は特に其談を請うて掲ぐる
		◎秋田市にも我利商人暴利をむさぼる	昨日県では早速東京地方震災罹災移民救助の挙を企てて取あえず食料品買出しを開始した、県吏員の談によれば日用品は 2 日より頃に価格高騰し殊に食料品の如きは仲々手放すことをとせず、ある商店の如きは商品を秋田駅頭に運んで注文電報を沢山握り占め最高価の處へ売りつけているのさへあると聞く、2 日早朝木材、鉄材、セメント其他建築材料の高騰又日用品の騰貴を聞く
		◎秋田市出身の在京者約一千名家族等続々上京する祭典の余興節約相談	市内各商品の取引は東京に多き関係上各種注文の入荷を受くるの見込がなきと且つ生産地も被害を受けたる有様であれば一般に品拂底を見込みして 2 日午前から諸物価特に各種建築材木材、砂糖、パン粉、状袋其他各種とも殆ど倍額の暴騰を来し尚高値を見込みしてそれでも容易に売らぬと云ふ有様、震災影響は物価のみならず市内から東京に行つてゐる者は学生寄留者商用其他を合して少くとも千名を下らず各家族は生死の程を心配し昨日になつてから餅やパンの食料品を携帯して状況の向も少からずあり
		○村地部長一行震災視察昨日上京す	村地警察部長は保安課警部、高課刑事、農務課属を随へ昨午午後 5 時上京に途に就いたが滞在 1 週間の予定
		○赤十字支部救護班昨日上京す	日本赤十字秋田支部では東京地方震災に際し救護班を組織することに決定昨午午後 5 時支部主事、事務員 1 名、看護婦 2 名を従へて上京の途に就いた尚外に救護班 2 組組織して彼の地に向ふべく準備中
		◎秋田大林区署の貯木約 10 万石また命令が出ないか協議の上一寸行て見る	東京市および付近の大地震災とこれにともなひ大火でほとんど全滅にて復旧に無限に木材を要する、秋田木材の総支配たる秋田大林区署に何等かの電命あるやと同署を訪へば通信機関の不備の為めかいまた何等の命令も着て居ない
9/5	2	○救援事務負担本県に於ける	県では大震害に際しおのおの救援事務を分担し救護の迅速と徹底を期す、米の買入及食料品の買入に関する事務、義援金の寄付事業に関する事務、日用品の寄付募集及他係に属せらる事務、輸送に関する事務、会計に関する事務
		○岸本知事救済激励す	知事昨日各郡市長に宛左記同文電報を以て京地震災救済に努力されたき
		○応急救済策餅を輸送する	県震災救済のため米穀 1 万俵輸送の計画を立ててゐるが応急の救済策として餅を輸送することとし昨日中に秋田餅米合資会社牛島河辺餅米会社等より餅米 30 石を求め市内餅屋、酒造家に依頼して製餅し本日朝に発送することになった
		◎生き地獄の如き帝都の震災最中の 3 日間を駆けつり廻り昨日帰市せる N 氏語る	上野から品川の海が見たる焦土、27 日日本橋の呉服店の荷開に列するつもりで 26 日に出発した、地震があつた日は丁度塚本(日本橋伊勢町)にいた、田端で漸く汽車に乗り赤羽まで行きましたが赤羽で降りて川口町まで歩き 3 日午前 11 時川口町発の汽車に辛うじて乗りました、福島に着いたのが夜の 9 時 4 日午前 2 時に福島を発車しましたがどうして帰つたか分かりません
9/5	4	◎焦都を免れた T 君語る八部通り焼けて悲惨の極だと	八分通り焼けて悲惨の極み、米穀商 T 氏 2 日午後 8 時頃京地を自動車で発して大宮駅から急行に乗車して 3 日午後漸く帰市した同氏の談、各区を自転車で駆け廻つたが佐竹侯爵邸は無事
		◎震災地に入る者の必要条件列車乗客の注意	戒厳令により東京、横浜は勿論其他一帯に亘り入京を禁止されたが何れも県係官吏出張し居り震災地に入るものを審査なすそうで其条件は、公務を有する者、自分給養の途あるもの、震災地に家族を有するもの右以外は絶対に入京を許さない、これが為め秋運では乗車券発売の際注意する旨を各駅に通達
		◎鮮人等多数東北へ入り込む本県なども注意を要す	信越線方面を経由東北にも入り秋田にも相当入り込み市内も警戒を要する
		◎佐竹家全焼す	富士見町 1 丁目の佐竹侯爵邸は 1 日午後前震災にて全焼した

付録(続き)

月/日	面	見出	要約・説明
9/5	4	◎秋田署でも奸商を取締着々調査を行う	秋田署前日来署員を派して内偵厳重警戒と調査に努めつつあり、暴利商人に対しては厳重な取締を励行することになっている
		○本県から食料品東京に発送	震災にて本県から東京に向け発送したものは全部食料品で3日夜当市3車横手約28車
		○通信工手16名上京昨日機関手も	秋田運輸事務所から3日通信工手16名電話機14ヶ其他付属品を携帯せしめて午後5時38分の上り急行にて上京、4日は機関手3名、火夫3名に3日分の食料を携帯せしめ応援のため午前11時37分上り直行列車で上京
		○東北本線開通する	東北本線は昨日から日暮里、常磐線は南千住まで修理成りて開通
		○急行満員切符発売せぬ秋田駅	秋田駅午後5時38分発上り急行列車は昨日青森にて既に満員となり秋田駅では切符発売を停止
		○帰市した遭難者32名	東京市の大震災に遭ひ避難して帰つたもの秋田駅に下車3日に10名、4日急行列車で13名、同日午後の下り直行で9名
		○罹災者は無賃乗車	3日秋田運輸事務所電罹災者東京より国元へ避難する者は無賃乗車
		○ガソリンを無賃輸送	其筋の命令により日本石油土崎から発送するガソリンにて川口着震災地官公衛団宛の分は救恤品同様と見做し無賃輸送
		◎上京者に注意食料と市町村長の身元証明を要す	本県上京の途に上る人々も昨日あたりより非常な数上りつつある、東京付近一帯は戒厳令を布かれたるをもつて上京者市町村長の身元証明書を必携又滞在日数中の食料品を携帯せねばならぬ而も目下東京に入るには信越線ただ一線のみ
		◎通信機関の復旧に努む秋田局から椅子まで送る	東北、北海道よりの電信は仙台、新潟にあつまつて金沢を経て名古屋以西に通ずるが至急報でなければ通じない、栃木、茨城には昨日からやうやく通信可能となつたが、埼玉、千葉、東京、横浜方面にはいまだ通信不能、東京市の通信復旧について仙台通信局より工夫200余名其他通信局より工夫を上京せしめて速かに通信の途を拓くことに努力しているゆえ今明日中には12線の全通を見る予想
		◎個人乗客には切符を売らぬ救護団体には入京を許す	仙台鉄道局より4日午後5時に秋田運輸事務所に到達したる通牒、震災地の混雑甚だしくため救護を目的とする団体にあらざれば入京を許さず個人乗車の如きは途中より引返さるる有様、公務を有する者救済を目的とする30名以上の団体以外の個人乗車に対しては絶対に乗車券を発売せしめさることとなつた
		◎日枝神社祭典余興は遠慮する統前町で寄々協議中	来る14、5両日の市内外町総鎮守の日枝神社例祭(中略)余興は廃止説濃厚、各町に於てもそれぞれ上京者もあり市内同様其安否を憂慮しつつあれば従つて人手は少なかるべしと観測されて居る
9/6	2	◎本県の救援費65万円昨日の県参事会にて決議	県は5日午後2時半より県参事会をひらき本県の救援費予算は65万6800円、米2万石の買入費65万円と此運搬費5000円
		○種牛馬共進会中止せず質素を旨として	10日より当組合構内において開催秋田県種牛馬共進会、牛馬匹の運搬上貨車の配給等には差支なき見込、祝宴会などは催せず質素を旨とし開会
		◎小屋かけ材料3万石徴発さる能代及大館付近より	東京市および近県罹災者救済のため9月2日公布した非常徴発令が5日本県に達し、小屋かけ材料3万石の徴発を命じられた、岸本知事内務部長ならびに5日来県した商務技師、大林区所長等と県庁において協議、小屋かけ材料の3万石は主として能代及大館附近より徴発する方針、鉄道輸送にせば貨車400車を要するため貨車の配給に困難を感じ、故に徴発地より青森港まで陸路輸送し同港より船舶にて海路輸送すべきやにつき深更まで調査を重ねている
		◎食料品輸送準備成る米穀2万俵副食物器具類	大震災救援のため本県より主要食糧の米穀2万俵輸送計画をたて県下の米商、農業倉庫、地主に買上交渉、予定の2万俵は輸送しうる準備ができた、6日午前8時貨車で送る手筈
		◎県人救護班組織故郷との連絡を計り安否の調査を容易ならしむ	巡查部長1名巡查2名を1隊とするもの3隊を組織し9月5日午前4時出発、高野属を隊長として医師1名人夫5名を1隊とし、天幕、寝具、衛生材料自転車等を携帯し同日午後5時急行を以て出発
		◎差当り小屋掛材は12万石を要する秋田3万石を出す方針	雨露をしのぐ仮小屋用材調達に秋田、青森両県に派遣された農務省山林局技師は2時間延着して5日午後零時58分に秋田駅に入つた、木材12万石を大阪で6万石、秋田から3万石、青森から2万石、東京近県から1万石を出す方針
9/7	号外	○佐竹邸焼けぬ	東京麹町区の佐竹侯爵邸は一時焼失したと伝えられたが焼失は免れたと云ふ
		◎本県内から木材を契約	小屋掛材料徴発のため5日来県した農務省技師県庁にて岸本知事、内務部長、勸業課長、技師、大林区署長、林業課長、運輸事務所長其他関係官と協議、救護事務局が本県に割あてた仮小屋3万戸分全部貨車輸送にて6日より15日に毎日58車465輛づつおくる計画
9/7	1	◎筏にすがり一夜を明し九死に一生をえて帰つたM氏は語る	今回の震災で最も被害が多く且つ凄惨を極めたといふ深川区三好町の出張所から店員と共に九死に一生を得て4日夜帰宅した土地崎港町前田製材株式会社社長M氏を訪ねた

付録(続き)

月/日	面	見出	要約・説明
9/7	2	◎今次の災害と財界に及ぼす影響	通信連絡不能であつて殆ど確報と認められるべきものがない為め之財界に及ぼす影響を窺知すること出来ぬが、木材界積極的影響は期待されない、火災保険は何等打撃ない生命保険は甚大の損害
		○第2回輸送 2803 俵	東京震災救援のため本県から5日に積みこんだ第2回米穀輸送は2803俵
		○県衛生会救護班組織 6日直行にて上京	秋田県衛生会医師事務長および看護婦長山方外9名の救護班を組織し6日午前11時の直行にて上京、救護材料は秋運と特別交渉の結果多量に携帯、目的地は臨時救済事務局の指示せる場所において救護に従事する、第2班第3班準備中
		○第2,3班編成中	本県私立衛生会の第1班救護団は別項の如く昨日出発、第2班第3班はさらに編成中第2班は8日に出発第3班は10日出発、各班とも内務省救護局の指揮をあおぎ部署に着く、各班とも300人を手当し得るだけの準備を為し出発
		○沿道青年団軍人会活動東京避難民に対する幹旋	本県鉄道沿線に於ける飯詰、横手、湯沢等の各駅に於て青年団並びに在郷軍人等出張し帰来の避難民に対し茶、弁当、パン等種々葦毛救済
9/7	4	◎市役所救済班秋田駅に出張し罹災民に応急処置	秋田市役所では東京大災害避難民救済のため昨日から助役を主任として所員並びに看護婦を引率し秋田駅プラットホームに救済所を設け秋田駅下車及び通過の下り各列車の罹災避難民を供与し負傷者等にも応急の処置
		○県の救護費 5 万円一先ずうちり	県の震災救援事業も昨今熱化し煎餅、生活用品、米穀その他食品の輸送に日夜忙殺されているが米穀以外昨日迄に買上たる金額は約4万5千円に達している
		○日用品や食料発送昨日本県から	京地震災救援のため昨日県において発送せるもの佃煮、餅、ローソク、提灯(以上1車秋田発)、うどん、木炭、日用品(以上1車秋田発)、味噌(以上1車大久保発)、素麺(以上1車秋田発)筵(以上2車秋田発)、木炭(以上7車)
		○村地部長の視察報告 惨状甚だし	震災状況視察の為め上京中の村地警察部長一行より電報、避難者多し惨状甚し、6日午前3時40分村地警察部長東京発
		○救護団の範囲決定医師救護人を必要とする	鉄道は救護団に対しは無賃乗車、医師看護人などの一団無賃扱ひすへき、その他の青年団若しくは在郷軍人団の如きは其の取扱ひをなさぬ旨通達
		○児童救護	仏教青年団救護班11名5日午前11時の上り急行列車にて出発上京、東京罹災児童500乃至300名を引きとり市内各寺院に収容救護
		○秋田教会でも避難者救護	日本メソジスト秋田教会にても牧師以下数名の協会員が餅、梨、手拭、草履、半紙、仁丹等を準備して救護に努力
		○秋田駅下車避難民 日々多数	東京から避難して秋田駅に下車する者日々多数あり3日の数は明らかならぬも十数名で4日は25名5日は62名、昨6日は午前11時55分着列車で56名であるがこれは全部無賃乗車の数
		○日石ガソリン続々発送す	土崎日石から東京へ送つたガソリン数量は5日までに2597箱に達し尚続々発送
		○荒川青年団救護に上京	仙北郡荒川村青年団員100名食料医薬品を携へ6日往復1週間の予定で出発
		○騰貴せる亜鉛板商人使用者県内買占め	目下著しく高騰したものは亜鉛板で同品は市場品切れ
		○日吉神社大祭余興廃止費用は寄附	14, 15 両日の市内外町鎮守日吉神社例祭大災害のため一昨夜協議の結果余興は全部廃止してその費用の一部を罹災救に寄付のことに決定
		○市工業展延期	来る13日より開会すべき第2回秋田市家庭工業展覧会は延期のことに決定す
		○余興費を節約醍醐村の祭典	醍醐村鎮守三吉神社秋季例祭は来る17, 18日の両日なるが準備中の余興大いに節約し費用のうち若干を救護費に義捐せんと協議中
		◎避難者と称し浮浪者入り込む	在京浮浪者が入市せるものもある現に一昨日市内某料理店にাগり避難民と称して料理を注文し勘定となるや一文も懐中せずとて支払いせず
		○入院患者無事に帰る	市内大工町Tは病氣治療のため入院中に震災あり夫3日上京、妻昨日無事帰市
9/8	号外	◎第一七連隊昨夜出発す官民多数の見送りを受け機関銃隊は取消し	400名昨7日午後7時秋田駅発の列車にて4輪客車10輛、貨車2輛を連結分乗の上出発
9/8	1	◎妻を呼ぶ人母を呼ぶ声上野飛鳥山に満つ深川本所方面以外には余り死傷者を認めぬK氏の实地視察	秋田市内K氏2日夜上京して3, 4日両日にわたつてつづさに視察した震災の惨状、秋田を2日午後5時38分に出発
9/8	2	○3万戸の材料50万円本県より調達	罹災者に給與する仮小屋12万戸中本県より3万戸分の材料を調達しその価格は52万円

付録(続き)

月/日	面	見出	要約・説明
9/8	2	○秋田大林区の分はたぶん無償杉皮 5 万 5 千 5 百円	罹災者給與する仮小屋建築に要する本県割当て 3 万戸分の材料、杉皮 5 万 5500 円は秋田大林区署より出し之は多分無償のこととなるであらう
		◎仙通中心の通信網北千住に出張所を設け東北 6 県は言う迄もなく東北以北の通信担当	仙台通信局にては東北 6 県はいふまでもなく北海道等東京以北の通信を担当して通信機関を完全ならしむため 5 日夜山岸通信局長自ら東京に出張
		○開通 3 線信越東北常磐	4 日夜から東北本線、常磐線も夫々開通、東京に通ずる線は信越線を加えて 3 線
		○公認運送店救恤品輸送無賃で取扱ふ	秋運管内の公認運送店組合では震災地行の救恤金救護品県託送のもの若くは市町村の証明あるものを受託する場合一切無手数料にて取扱
		○材料調達了す北玉樹技師青森へ	仮小屋材料調達のため 5 日来県した農務省技師は本県の調達を了へ 7 日青森県に出張し 10 日帰庁
		○婦人団体の避難民救護秋田駅で活動	避難民に対する救護市役所、秋田教会等の活動、この外鉄道婦人会をはじめ愛国婦人会その他各婦人団体が最も目ざましい活動をしている
		○淀川警部帰庁	東京地方大震災の視察をかね救護の連絡を取るため村地警察部長と共に上京した保安課の淀川警部は昨日午前 11 時の急行で帰庁
9/8	3	◎十七連隊に昨日出動下命午後 5 時まで出発準備	一個大隊編成機関銃隊を含む秋田編隊は 7 日午後 7 時 30 分登り列車に客車を増結し秋田発
		○小屋掛け材料輸送昨日から開始	昨日震災地小屋がけ材料として木材以外筵 12 万 6200 枚、縄 3 万把を即日発送開始 12 日を以て終る筈
		○木炭発送 3000 俵を	6 日木炭 3 千余俵(10 車)を横掘並に二ツ井より田端に輸送を終つた
		○馬鈴薯と餅を送る昨日県から	震災地救急のため昨日本県にては煎餅 2100 貫輸送する處あり尚馬鈴薯 60 俵も同時に発送
9/8	4	○乗車券は大宮から	東京行きは日暮里まで開通し乗車券発売していた所混雑のため到底収容し切れないため昨日から大宮までしか発売しないことになった
		◎県済事業の第一報を斉して東京災害の実況を語る県保安課荒川警部	震災の被害地から電信電話は勿論郵便すら通じないので殆ど消息不明、県の救助事業にて 3 日の急行で部長と共に出発翌日川口駅で下車し自転車で霞ヶ関まで赴いたが内務大臣官邸に到着したときは既に 4 日の午後 6 時であつた
		◎災害地発着の電報暫く取扱ふ 7 日から開始但し私信はまだ駄目	災害地より発着する電報は 7 日から取扱い開始される旨秋田局から通牒
		○医業団体の救護団第 2 班 8 日出発す	県医師会、同歯科医師会、同薬剤師会、同衛生会連合し県後援を得て救護団を組織、第 1 班 25 名を引率し 6 日出発、第 2 班 8 日午前 11 時 37 分出発に確定
		○県衛生課の繃帯輸送本日 1500 本救護団が携行	県衛生課繃帯 7 日 30 反の白木綿をもつて本日出発の救護団が携行する
		○避難帰郷者益々増加	東京から避難して秋田駅に下車するものは一日毎に増加して昨日午後 11 時 55 分着列車までの下車者は 63 名である、各避難者は各駅においてそれぞれ救助を受け特に本県に入ってからは一層手厚き救助を受けているよし、本市のみならず県内各郡からも行つている、京地在住者の多くはほとんど失業しかつ住宅なきため概して野宿今後益々帰郷すべき傾向がある
		○相染青年団避難民慰問土崎駅にて	6 日午後の下り直行より京地避難者にて帰省せるもの土崎駅通過者に対して果物を提供
		○清酒品評会無期延期	26 日開催の筈なりし県酒造組合連合会主催全県清酒醬油品評会は京地震災救済に忙殺され亦遠慮すべきが当然だといふ見解とて無期延期に決定
9/9	2	○製炭現物 40 万貫大林区署より輸送	救護用その他需要の木炭を全部東京市に輸送せよとの政府より秋田大林区署に電命、秋田大林区署製炭現物 40 万貫をとりあへず 8 日より東京に向け輸送開始
		◎青森の不足材料本県にて調達	罹災者に給與する仮小屋の材料青森県では現物少く不足分はさらに本県より調達すべく技師は昨 8 日夜来市
		○罹災救助講演会本日午後 7 時より記念館にて	7 日午後 7 時から記念館で罹災者救助に関する講演会を開催
		○在郷軍人分会へ通牒救護班派遣に付	帝国在郷軍人会秋田支部長より各連合分会長への救護に関する通達を発した

付録(続き)

月/日	面	見出	要約・説明
9/9	2	○赤十字支部救護班第一、二隊派遣	赤十字秋田支部より救護班を派遣、3日出発の第1班7日出発の第2班
		○本県救護第二事務所	震災救護本県第二事務所を田端貨物ホーム側三浦小一方に設けた
		○震災彙報一般に観せる	臨時救護事務局情報部4日来震災彙報として1日一回の公報を出しつつあるが今後県に到達せる公報は県議事堂の塀に貼りつけて一般に見せることにした
9/9	4	◎新任式当日の賜餐は玄米飯に梅干し一つ県人消息本部をI氏宅に置く	土地信託のK氏は3日上し7日下り急行で帰市、滞在中の惨状を語つて曰く金融機関は全く停止状態、県人の消息を報告すべく麹町富士見1丁目のI氏方に本部を設置
		◎東京へ送る本県の木材青森の不足分も引受けて貧乏揺さもせぬ	青森県の調達不足1万2,3千石本県の木材豊富の事実を物語っている
		◎本県に於ても暴利の取締徹底にやるべく愈々具体案なる	京地震災の報あるやその余波は當地にもおよび主として日用品其他の物価に高騰をきたし或は売惜しみをなすものあり、或は買占めをなすものあり
		○本県の救護事務所3個所に	秋田県の震災救護事務所第1班を川口町に第2班を田端においた、昨日より隅田川駅まで列車開通と共に第3班を隅田川においた
		○赤十字支部年釀金取纏送金方各郡へ依頼	赤十字秋田支部救護班を上京せしめ多額の費用を要するところから秋田支部長から各軍の委員長宛に年釀金取纏め至急送金方を依頼
		◎災害地方へは旅行をさせるな宿舎も食料もない	一般旅客に対しては特別やむを得ざる事由による者の外は一切東京横浜地方に旅行せしめざる様にせられたし
		◎在京不明者は県に通告を發せ救済上便宜であらう	当局は全市にわたる在京者の不明人名簿を作製するか或は市人にして不明の親戚あらば速やかに県に通知を發しておくこと便宜であらう
		◎災害地方より漸く郵便が来る郷里の人々愁眉を開く	東京横浜の災害地より一昨7日に至り当地方にもはじめて郵便の到着を見災害地方に父兄、親戚、知人を有する郷国の人々は漸くこれ等の安否を知る
		○更に県より食料品	県震災罹民救済のため昨日食料品合計2車を輸送
		○秋田駅下車避難者数合計349名	昨日午前まで秋田駅に下車した東京地方からの避難者64名、3日からの合計は349名
		○救恤托鉢執行	由利本荘市仏教各宗有志の一同8日より12日迄5日間
		○鈴木技手無事	鈴木林業技師は今回の震災に際し上京中にある死亡せるものを思はれていたが自身にて差出せるハガキと同時に帰市
		○鷺尾氏は無事	在京の鷺尾氏から書信があつた
		○青年団の活動	罹災者続々と下り列車の手逃れ来るや雄勝郡横掘町青年団に罹災者救護団を設け少年団手伝ひ横掘停車場で食料等を給し下車せるものには休養宿所等の世話
		○湯沢町民の罹災民慰問	湯沢町全町民全部停車場に出迎えて罹災民を慰問し尚自動車に乗らしめ家に届け駅前高田屋は通過亦下車する遭難民にたいして無料宿泊をなさしめ
9/10	2	○東北各県への電達事務8日より開始	震災救護に関する内務省震災事務局よりの通報は凡て宮城県を通じて岩手、福島、青森、山形、秋田の各県へ伝達することとなりその通達があつた
9/10	3	◎本県の工産物の能率増進の計画将来の要求激増にかんがみ委員を設けて奨励	震災の結果需要激増すべき日用品に対しては極力生産能率の増進を計画する要あり
		◎奥羽本線は列車発着を制限上り急行は乗車させぬ	地方からの見舞上京客の為め東京市内に益々混雑するばかり、此上は列車の発着を制限なすより外に方法ないといふので昨日から当分奥羽線上り急行702列車は郵便物小荷物の外一般乗客の取扱ひをなさぬ、上り702列車(秋田午前4時15分発)は宇都宮にて打切と変更され尚東北線、常磐線の如き東京団体も取扱停止
		○配達不能の郵便物還付	仙通局より秋田郵便局に達せる災害地に対する郵便物は当分送達の途なきに付配達不能のものは差出人に附す
		○市内商店の在庫品検査	奸商は嚴罰に処す
		○本県救護品輸送予定	本県計画による救援品の輸送予定は左の通り、製板3車、杉皮1車、其他2車
		○県で送った食料品	3日より9日まで発送を了した救恤用食料品並に日用品
		○牛嶋町の救恤品募集	牛嶋町に於ては全町を4区に分け各1区に委員3名に吏員1名を加え各戸を訪問して災害地方の現状を告げ義援金品募集河邊郡役所へ付した